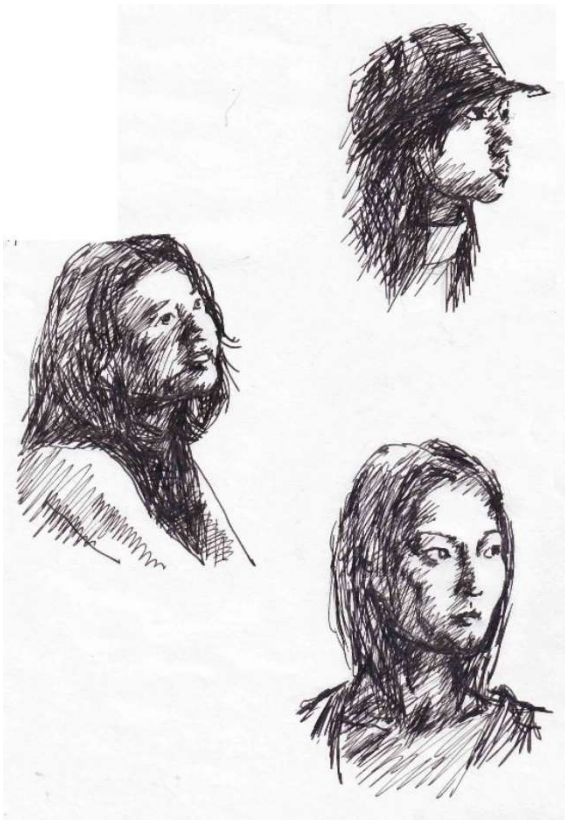


特集Ⅰ 私が選んだ日本の女優ナンバーワン(順不同)

今回の特集は、数多あまたいる日本の女優の中から、あなた好みの一人を選んでいただくという贅沢な？テーマです。好みといても、いろいろな切り口があります。可憐さ、美しさ、色気、品、役者としての巧拙など……。そんな粋や年代を一切取っ払って、自由にチョイスしていただいた結果が次のようになりました。昨今の映画は、昔と違って、この女優が出れば、客が入る。といったヒロインの時代ではなくなりました。果たして皆さんの選んだマドンナは？

編集部



池脇千鶴

植田沙織 むぎのえいが部

呉美保監督作品『そのみにて光り輝く』で池脇さんを見て、美人とは思わなかったが(池脇さんごめんなさい笑)、美しく若々しい白い肌、不思議な女性らしさに魅了された。その後、『きみはいい子』を観ている途中に池脇さんが出ていると知り、「どこに？」と思ったら(レンタルだったため、ケースか何かを観て出演していることに気づいた。映画の中では気づかなかった)、かつて親から性的虐待を受けた母親役。化粧つきのない役だが、確かにその人が実在している、と感じられる演技だった。子供時代の辛い経験に屈することなく這い上がって日々を戦う女性。日常を懸命に生きて、身近な人たち、あるいは自分にさえも投影できそうな、一人の女性がそこにいると感じた。

それからは『ジョセと虎と魚たち』など幾つか作品を見ているが、それぞれに役柄がまっつたく異なり、魅力を感じる。個人的には恋愛ものに出ている女性的魅力満載の池脇さんが好きです。

北原三枝

吉村英夫 映画評論家

『月は上りぬ』の北原三枝を選んだことがある。私が49歳の時、「文藝春秋文庫」の「私の好きな女優」のアンケートに答えたが、日本、外国三名ずつ。邦画では、続いて『地上』の野添ひとみ、『忍ぶ川』の栗原小巻。北原を選んだ当時、私は裕次郎にまだ好感をもっていたからだろう。

『月は上りぬ』は小津の脚本を、田中絹代が演出している。見たとき中学三年生だった私は北原のボーイッシュな容貌、髪型、動きに好感をもったようだ。奈良が舞台で、『万葉集』の歌番号で想いを伝える内容が、文学に興味を抱きはじめて私の気持ちに合致したのかもしれない。モノを思い始めた頃である。

野添ひとみも栗原小巻にも今の私はほとんどしらっとした気分しか残っていない。なお北原は全体の第20位。249人が選んだベスト3は、1が久我美子、2は高峰秀子、3が吉永小百合となっている。現時点で選べといわれたら、ただだたまどうばかりだが、最終的には「なし」と応えるだろう。

栗原小巻

長谷川哲也 三重フェス

栗原小巻は昭和40年代半ばから50年過ぎまで光彩を放ち、その活躍ぶりはめざましい。映画では、『戦争と人間 第一・二部』（昭和45・46年）において、美しさの中に芯の強さを秘めた中国資産家の令嬢を演じた。

続く47年から49年にかけては、『忍ぶ川』『忍ぶ糸』『サングカン八番娼館 望郷』でそれぞれ主役を演じた。中でも『忍ぶ川』と『サングカン八番娼館 望郷』は高い評価を受け、キネマ旬報ベストテンで1位を獲得している。この受賞には彼女の魅力も一役買ったに違いない。

テレビでは、大河ドラマ『樅ノ木は残った』（45年）では主人公原田甲斐を慕う「たよ」役、『新・平家物語』（47年）では北条政子を演じ、お茶の間に好印象を残した。また、50年10月、世紀の超大作『風と共に去りぬ』のテレビ初登場が決まった時、主役ヴィヴィアン・リーの吹替え役について投票が行われ、彼女に白羽の矢があたった。

志田未来

太田 義幸 通りすがりの映画好き

いつまでも演技を観ていたいと思わせる女優である。初めて彼女を観たのは、天海祐希主演のテレビドラマ『女王の教室』である。天真爛漫な女の子役で始まった準主役の生徒を演じていたが、クラスでどんどんと厳しい状況に遭遇するも強く生きていく様を見事に演じきった志田未来は実に素晴らしいかった。当時12歳という年齢であり、精神的にも厳しい収録だったろうに、よくぞ演じきったものだ。テレビドラマには出演するが映画出演はそれほど多くなく、映画では基本的に助演である。主役としては『誰も守ってくれない』があるが、あれは佐藤浩市が主役かも。なぜ、彼女の演技をずっと観ていたいと感じるのは自分でも分からないが、演技にひきつけられるものがある。主演映画になかなかお目にかかれないのが残念であり、映画館のスクリーンで彼女の演技を堪能したいものである。いつの間にか一般男性と結婚していたのにはビックリしたが。

墨田ユキ

水野圭次郎 むぎのえいが部

私が非常に印象に残っている女優は墨田ユキです。永井荷風原作、新藤兼人監督の映画『濯東綺譚』での妖艶な魅力は今でも脳裏に焼き付いています。新人とは思えない大胆な演技で相手役の津川雅彦がタジタジだったとインタビュー記事で読みました。

元々、AV女優、レースクイーン、モデルなどとして活躍した後、女優に転身し、NHKの『春日局』『武田信玄』に出演し、『濯東綺譚』のオーディションに合格し、ヒロインの座を射止めました。その時、映画のタイトルにちなんで芸名を墨田ユキに改名したことから作品への思い入れの強さを感じました。しかし、その後数年、テレビドラマやバラエティ番組で活躍した後、30歳くらいで忽然と表舞台から姿を消してしまいました。今も女優を続けていたらどんな演技をしているのだろう。非常に惜しい人材でした。

田中裕子

林久登 スタッフ

出てこい、ポスト裕子！

私の好きな女優と言えば、ちよつと古くなるが80年代に元祖「魔性の女」と呼ばれた田中裕子だ。あの『ザ・レイプ』（82年）で見せた女の情念、『天城越え』（83年）のしなやかで凜とした娼婦、向田邦子の『響子』（96年）における情熱的な女、決して美形ではないが、あの妖艶なたたずまいと湿ったセリフは、官能的で、たまらなく魅力的だった。私は常々女優なるもの、すべてを曝け出してナンボと思っている。その点彼女は、女の持つ情動を自然体で出せる稀有な女優だ。そのためなら、肉体の露出を全然いとわない。いさぎよかった。最近の女優で、ポテンシャルを感じるのは、某社のビールのCMに出ている躍動感あふれる「檀れい」。確か『武士の一分』（06年）でデビューしているが、その後パツとしていない。彼女の素材を引き出せる監督はいないのだろうか。女優として勝負するラストチャンス、もちろん脱ぐのを躊躇せずだが。有森也美も筒井真理子もオーバードライブから開花している、まだまだ遅くない。「出てこい、ポスト裕子！」なのである。

寺島しのぶ・安藤サクラ

井上静夫 同人誌主宰

今、気になる女優たち

数多くの映画女優の中で好きな女優：とくれば、映画黄金期の原節子や今なお活躍する吉永小百合などをあげる人も多いと予想されるが、ここはあえてそうした女優を外して、今気になる女優の何人かをピックアップしてみる。

まずは、映画好きなら誰しもナットクの寺島しのぶと安藤サクラ。どんな役も軽々とモノにしてしまい、女優魂を秘めた女優の中の女優。もはや今の日本映画に欠かせない存在である。映画は主演女優も大事だが、実はその脇を固めるバイプレイヤーにかかっているといっても過言ではない。映画を支え、盛り立て、存在感を放つバイプレイヤー。こういう人たちこそが映画を作っているのである。あまたいるバイプレイヤーの中でも今、平岩紙と江口のりこ、渡辺真起子が気になっている。彼女らならではの存在感はもしかしたら主役以上かもしれないと思わせてくれるからである。そして若手なら石橋静河、門脇麦に注目したい。いずれもちよつと異色の、味のある演技で映画にスパイスと膨らみをもたらしてくれる。

二階堂ふみ

村上 暁 スタッフ

僕は出演俳優で映画を見ない。「〇〇が出てるから見る」という発想はないのだ。好きな監督、または面白そうな予告編が、映画鑑賞の動機となる。

「私が選んだ女優」…。面白かった映画のパンフレットから探してみようかなー、なんて思いながらパラパラ見返してみる。

映画の登場人物を思い出して、思わずにやけてしまうキャラクターは、二階堂ふみが一番多かった。彼女が演じる役は、すごく魅力的だ。主演でも脇役でも、確実に映画の魅力を上げていく。

『脳男』『地獄でなぜ悪い』では凶暴な少女。『私の男』では実の父親と肉体関係を持つ女子高生。「ムカつくっ」と思わせながらも目を離せない。コミカルな『ジヌよさらば』『翔んで埼玉』、性悪女の『渴き』『何者』、可愛さ全開『蜜のあわれ』等々。面白い映画の面白いキャラクターは、二階堂ふみが演じている。これからも、スクリーンでの彼女との出会いはそんな感じだろう。

広瀬すず

森 次男 スタッフ

女優、広瀬すずを初めて生で見たのは2015年2月の東スポ映画大賞受賞式の席である。この日は綾瀬はるか、長澤まさみ、是枝裕和監督らと同じ円卓テーブルに座っていたが、ふたりの大女優のオーラで影が薄く感じた。しかし、彼女が出演した『海街diary』をあらためて観て、新人で脇役ながらもその繊細な演技力に圧倒された。この作品では数々の映画賞の新人賞を総嘗めしている。

また、翌年の『怒り』では、米兵に暴行され犯される高校生の役を体当たりで演技し、早くも清純派からの脱皮を図ったのには驚かされた。この演技の経験を生かし、17年の『三度目の殺人』では近親相姦という難役を見事に演じきっている。

彼女の魅力はセリフが無くとも、顔の表情だけで全てが表せる天性の演技力に尽きると思う。アイドル路線に走らず、じっくりと作品を選んで着実に本格派女優として成長している。今やNHK朝ドラ『なつぞら』で国民的スターとして快進撃の真最中である彼女をナンバーワン女優としたい。

牧瀬里穂

伊藤有紀 映画監督

沖田総司は、Bカップ

お題をいただいて、考え込んでしまった。俺って女優で映画を観てねえんだな、と思った。作品単位でなら浮かぶのだ。『西鶴一代女』の田中絹代『乱れる』の高峰秀子『乱れ雲』の司葉子『神々の深き欲望』の沖山秀子『犬神家の一族』の高峰三枝子『隠し砦の三悪人』の上原美佐……。あ、一人いた。映画を観て、初めて恋をした女優。親にかくれ布団の中でセズリこいた女優。それは、つかこうへい原作の『幕末純情伝』という作品で沖田総司を演じていた、牧瀬里穂。

その後観た『東京上空いらっしやいませ』も『つぐみ』も良かったが、『幕末……』の彼女は一際輝いていたと思う。駄作扱いを受けているが、渡辺謙の龍馬、杉本哲太の土方も良く、大好きな作品だ。その宣伝コピーが本稿タイトルだが、思春期の数年間、彼女のおっぱいを何度思い浮かべたかわからない。最初で最後の、銀幕の向こうへの恋だった。

松原智恵子

十河進 コラムニスト

女優は笑顔の中に寂しさが必要だし、たたずまいからは悲

しみが漂わなければならぬ。松原智恵子は、その条件を満たしている。彼女は『東京流れ者』では、いつも涙ぐんだ顔で「テツヤさん」としか言わなかった。その後、松原智恵子は『無頼』シリーズ六作（僕は小沢啓一が監督した四作だけが『無頼』シリーズだと思っていてくれど）でも、「五郎さん」と言い続けた。一体、彼女は何度「五郎さん」と言ったことだろう。そのニュアンスの違いだけで、彼女は五郎への気持ちを表現した。

彼女の最高の「五郎さん」は『無頼・人斬り五郎』で、伊勢志摩へ向かうフェリーから岸壁にたたずむ藤川五郎に向かって叫んだときだ。ラスト、死闘の果てに力尽きて横たわる五郎が顔を振ると、地面に落ちていたサングラスに夕日と共に松原智恵子が映る。その姿から、悲しみが伝わってきた。

水久保澄子

藤田明 映画評論家

だれも挙げないと思える人たちが思い浮かんで、サイレント期の水久保をまず挙げたい。成瀬の『君と別れて』、小津の『非常線の女』他の女優にない清澄。のち自殺未遂を含む不運な経歴に至るが、演出者によっては、清水の清澄を引き

出せたのである。

添えるなら溝口『残菊物語』の森赫子、稲垣『無法松の一生』の園井恵子も忘れがたい。森は戦後、失明に至る。園井は広島で被爆。新藤の『さくら隊散る』が彼女に触れている。やはり不運な二人。

吉村公三郎が見出して『春雷』でデビュー『偽れる盛装』にも出た藤田泰子。体を壊していた若いころ、気になったが、出演本数もないまま消えて行った。

スクリーンでも現実でも、異性は去る。痛みを誘うアンケート。戦後に見た1930代フランス映画の毒はいまだ去っていないことに気づく。

松たか子

岩崎 久美子 映画ファン

松たか子の魅力

新作が公開され、一番観てみたいと思わせる私の好きな女優は松たか子だ。その作品によっていつも違った彼女を感じる事が出来るのも、映画鑑賞の楽しみである。

『隠し剣 鬼の爪』では健気で可愛い女中役に自分まで清々しい気持ちになり、『ヴィヨンの妻』では人気のある

華やかな妻役が本当に眩しかった。かと思えば『告白』で復讐の表情に鳥肌が立ち、近年の『小さいうち』で不倫に堕ちる人妻の大人の色香を感じる。声優に挑戦した『アナと雪の女王』では、歌声が印象的で観客も老若男女問わず映画を反芻しながら口ずさんでしまう。

年齢とともに変わりゆく役柄、だがその力は衰えない。そしてどんな役にも品があるのと、演技の想像がつかないところが彼女の魅力だろう。これからもずっと見続けたい。



薬師丸ひろ子

田中 忍 三重フェス会長

私が日本の女優で最初に好きになったのは薬師丸ひろ子だ。

『野性の証明』（1978年）でデビューした薬師丸は14歳、私は19歳だった。まるでガールフレンドができたような喜びで、薬師丸の記事が掲載されている雑誌や彼女が歌うレコードもよく買い、彼女とともに年齢を重ねた。あれから40年、今も彼女を見るたびに初々しさが感じられるのは、デビュー当時の彼女の姿を重ねているからだろう。

さて、成人した私は過去の邦画を見る機会が増え、香川京子や若尾文子らの若い時期の美しさにも憧れている。が、薬師丸に抱いた恋心はない。大女優の若かりし時をアルバムで垣間見るときめきに似ている。しかし芦川いづみへのときめきはまた別だ。藤竜也との結婚を機に芸能界から引退し、現在の姿は想像すら出来ない。可憐さ、清らかさが漂い「和製オードリー・ヘプバーン」と呼ばれた美しさがある。デビュー65周年映画祭が今春開催されていたとの事。今日まで知らず残念である。

吉永小百合

西松 優 日本映画愛好家

吉永小百合さんへお願い

私の青春前期のあこがれは「吉永小百合」だった。映画館で彼女の明るく笑顔を見、声さえ聞けばそれだけで満足していた。七十本以上の映画を見、多くのDVDも持つ私は正真正銘の「サユリスト」だ。しかし、その後日本映画黄金期の田中絹代、原節子、高峰秀子等の映画やその生き方を見て考え方が大きく変わった。

老婆役も臆せず演じ生涯演技に生きた田中絹代、引退しフアンの前から姿を消した原節子、引退しエッセイストに転じた高峰秀子。大女優と言われる人たちの生き方は説得力がある。我が愛する吉永小百合は、七十歳を超えても二枚目役でサユリストのアイドルを演じ続け演技力は停滞し、興行力に甘えている。サユリスト世代が去れば、大女優として名前は残らないだろう。若さ保持も大事だが、もっと地道に演技を磨き年相応のリアルな役柄を演じてほしい。

今私の期待の若手女優は小松菜奈である。演技はこれからだが、勘がよく表情豊かで華があり幅広い役に挑戦する姿勢がいい。

若尾文子

中村藤生 スタッフ

女優、若尾文子は私にとって

こども心に記憶に残る映画が何本かある。小中学校当時は、学年全員で地元の映画館へ行くことが年二回程あった。スクリーンで見た可愛く、柔らかで綺麗な先生が若尾文子だった。タイトルは『一粒の麦』、集団就職を引率する婚約者の先生にお弁当をホームで手渡しシーンを覚えている。これが若尾文子をはじめて知った映像。片田舎の子供にとって別世界を垣間見ることができる映画は不可思議な世界だったと思う。近くに3軒の映画館があつて、邦画、洋画を問わず無作為に見ていた。自分にとって内向的な時期と重なる。洋画の女優をよく覚えている。E・テイラー、C・ベーカー、I・バーグマン、K・ノバク、J・シモンズ、C・カルディナーレ、S・ローレンなど。スクリーンがブロマイドだった。外国女優の肉体美とキスシーンなどドキドキものだった。わけもわからずに。

映画はもちろん監督ありきだが、女優がでてこないとはじまらないと思う。いつも惹きつけられるのは女優の演ずる姿だ。時代は女性により強く投影される。

若尾の映画出演第一作『死の街を脱れて』昭和27年(19歳)から始まり、日本の映画全盛時代の昭和50年〜60年代、若尾は監督との出会いに恵まれたと思う。また、大映への入社は合っていたと思う。溝口健二『祇園囃子』・『赤線地帯』に始まり、市川崑『処刑の部屋』、田中重雄『永すぎた春』、増村保造『青空娘』・『氾濫』・『止』・『清作の妻』、吉村公三郎『夜の素顔』・『越前竹人形』、川島雄三『雁の寺』・『しとやかな獣』など、どれも時折観たくなる。

若尾文子と共に増村保造、川島雄三を知った。若尾は溝口健二『祇園囃子』で女優資質を発掘され、その時代の監督につながった。特に増村監督が日本女性を描き代えねばと強く考えていたことが若尾に変革をもたらした。増村に女優にされた役者は『遊び』の関根(高橋)恵子、『第二の性』安田(大楠)道代、『大地の子守歌』原田美枝子、『大悪党』緑魔子など数多い。それぞれに一度観れば忘れられないくせのある女優の面々。

好きな映画を挙げるなら【増村+若尾】で『偽大学生』、『赤い天使』、『止』、『若尾』の映画であれば、『清作の妻』、『妻は告発する』、『雁の寺』。なぜ若尾のファンになったのか。昭

和38年公開の『越前竹人形』（若尾30才）の姿に凝縮感を持つ。独特の鼻にかかった声、ナイーブさと妖艶さ、色香立つ姿はまさにミュージズ。この辺りは私個人の想い入れ。『一粒の麦』から始まり軌跡を描きながら大映の終幕で閉じられた。大映といえど京マチ子が本年5月その生涯を閉じた。わたしは京と若尾が共演した『浮草』を観て哀悼した。若尾が京の訃報を知ってコメントした中に「わたしに京さんの肉体があれば」のくだりを知って想うのは、そうであったなら更にひと回り大きな女優を観れたらと夢想した。

